

キウイフルーツの収量構成要因の定量化

(第 2 報)葉果比,枝長を異にした樹体の果実生産能力の比較

末澤克彦・土居新一

キウイフルーツの結果枝,結果母枝単位での果実生産能力及び着果量を変えた 3~5 年生の個体(ヘイワード)を用いて,着果量,平均果重,収量相互間の関係を調査した。

1. キウイフルーツの結果枝は,枝長が長いものほど節間が長くなり,枝長と葉面積の関係は $Y=112.23X^{0.70}$ の相対成長式で近似された。

2. 結果母枝の基部を環状剥皮して着果負担(葉果比)をほぼ同一にした場合,平均結果枝長と平均果重との間に相関関係はみられなかった。しかし,1 母枝内の平均枝長が長くなるにつれて果実分配率は低下する傾向となった。

3. 1983 年~1985 年の 3 ケ年にわたり,着果量をかえた個体の果実生産能力を比較すると,平均果重や単位葉面積当たり果実収量は果実 1 個当たりの葉面積と極めて密接な関係がみられ,年次間の格差は極めて少なかった。